

クラス集団内の子どもの類似度： 「似ている」子どもはずっと「似ている」のか？

The Similarity of preschoolers in the class-group:
If there is a resemblance between two preschoolers at one term,
does the tendency persist through?

大 野 和 男

Kazuo OHNO

本研究は、クラス集団内の子どもの類似度から、クラス全体の評定の変化、クラス内のグループ化、そして年間を通じての一貫性があるのかどうかについて検討した。対象は年少から年長の各2クラスである。各クラスの担任に面接を行い、クラスの子どもについて一対比較を依頼し、評定の理由について語ってもらった。面接は各学期末に行った。結果として、以下の3点が見出された。

①一対比較による評定をクラスごとに見ると、ほとんどのクラスで学期によって変化する傾向があった。「似ている」「違う」のどちらの方向に変化していくのかはクラスによって様々であった。

②各クラスの子どもをクラスター分析によりグループ化を試みると、どのクラスにおいてもほぼ3グループぐらいに分けることができる。

③子どものペア間の評定は、年間を通じて比較的安定している。

【キーワード】 個, 集団, 保育者

I. 問題

人生において、年齢を区切りとすることは多い。運転免許・選挙権の取得など、挙げればきりが無い。文化的なことでも、成人や還暦の祝いなどはその年齢に達すると行われる習慣である。特に、学齢期以前では、年齢を区切りとして実施される社会制度がほとんどである。乳幼児健診を始め、就学などは、その最たる例であろう。「保育所保育指針」や「幼稚園教育要領」を見ても、年齢ごとにねらいや内容が記述されている。これは、年齢による発達傾向が存在するからであり、特に、子どもが小さければ小さいほど、年齢によってできることなどはかなり異なる。1歳違えばその違いは大きい。

しかし、同じ年齢といっても、そこには個人差が存在する。身長や体重だけを見ても明らかである。幼稚園や保育園ではクラスが形成され、子どもたちはそれを基本的な単位として生活を送ることになる。幼児期には一個の主体として周囲の世界に旺盛に進出する一方で、周囲とぶつかったり、周囲に支えられたり、周囲を取り込んだりしながら、他の人たちと一緒に生きていくことを身につけていく(鯨岡, 2001)。クラスという集団に所属する子どもが全て同じようであるかと言ったら、そんなことはないだろう。様々な子どもが1つのクラスとして集団を形成するのだ。刑部(1998)は、保育園における4歳児の「ちょっと気になる子ども」の長期にわたる集団への参加過程を関係論的に分析している。「ちょっと気になる子ども」が気に

ならなくなっていく過程で起きていたことがその子ども個人の知的能力やスキルの獲得といった変化というよりも、共同体全体の変容によることを明らかにしている。集団の中で、それぞれの子どもがそれぞれの立ち位置で生活し、違った側面を見せることで、その子どもが違って見えることが起こりうるのだ。

また、同じ年齢のクラスでも、クラスによってその特色は異なる。あるクラス集団に属した子どもは、同じ経験をすることによって、あるクラスの一員としてそのクラスらしさを身につけていき、そのことによってクラスとしてのまとまりも出てくるとも言える。子どもは、〇〇保育園・〇〇幼稚園という名前の施設や建物に登園してくるのではない。そこにいる保育者や友だちと一緒に過ごすために来るのである（前原，1997）。

さらに、集団の様相は、時期によって変化すると思われる。クラス集団形成時には、保育者を中心にやりとりが行われる。子どもの同士のかかわりを促すには遊びの場が共有できるような環境を用意し、子どもたちを出会わせることが必要であろう。特に、年少の時期くらいから、子どもと大人とのかかわりが減り、子ども同士のかかわりが増えてくる（Ellis, Rogoff, & Cromer, 1981）。安藤（1984）は、初めて保育集団を経験する幼稚園年少組を対象に、入園後1ヶ月間の相互作用について検討している。その結果、集団形成初期において、5月には身体接触を伴う敵対的相互作用が多く見られるが、7月には身体接触を伴わないものにとって代わることで、敵対的相互作用は男児から行われることが多いことを明らかにしている。謝（1999）は、新入幼稚園児（4歳児）の移行過程において、安定した友だち関係が6月から7月中旬にかけて形成されることを観察によって明らかにしている。

また、安藤（1985）は、幼稚園入園式から3週間の行動変容について、位置移動を指標として検討している。自由遊び場面の位置移動の量において、集団形成後1週間以内には性差が見られないが、それ以降男児の方が女児よりよく動く傾向があることを明らかにしている。こういった性差は、遊び仲間の選択にも存在すると言われている。Howes（1988）は、女児の方が遊び仲間として同性を選択する傾向が強く、男児は女児からの働きかけを無視したり、拒否したりする傾向があることを明らかにしている。

上記のいくつかの研究を比較するまでもなく、性差だけでなく、年齢差も存在する。岡野（1984）は、保育園入園2カ月経過後の相互交渉について、2年間にわたり3歳児の場合と4歳児の場合を観察し、比較検討している。それによると、接触量の平均は、4歳在園児が最も多く、4歳新入園児、3歳児（新入園児）の順であり、男児の方が女児よりも他児に働きかけることが多かった。

こういったクラス集団の中で、保育者は個々の子どもの特徴に気づき、配慮しながら、保育を行っているとされる。「時代の変化に対応した新しい幼稚園教育のあり方について」（文部科学省，2000）においても、幼児一人一人を生かす集団の形成が唱われている。一人一人の自己充実を図るような集団を形成し、そこで心と心とが触れ合うかかわりが持てるような保育の重要性が述べられている。園児が園でのスキルを身に付けていくには、そのクラスの保育者の影響があるはずである。保育者の思いが、クラス集団を形成するのに重要な意味がある。保育には、保育を支える親や保育者の信念が重要である。大人の側の知識の中核がこの種の子どもや発達に対する見方であり、保育への情熱や関わり方を作り出していることだろう（無藤，1992）。飯島（1991）によれば、保育集団における対人行動は、幼児が環境に慣れるように試

みようと教師がどの程度努力するかに左右され、保育を受ける子どもの数と保育者の人数との関係、保育者の保育経験や価値観によって異なっているという。

ここまで見てきたように、クラス集団における保育者の果たす役割が重要であることは言うまでもない。年齢によって分けられたクラス集団の場合、年齢的に同質でありながら個人差を持つ子どもに、保育者は関わることになる。その際、保育者は、子どもたちをどのように見ているのであろうか。おそらく、様々な視点から子どもたちの類似点や相違点を探っているのではないだろうか。大野(2005)は、個の発達と集団の変容の関係について検討した。しかし、ある時期に「似ている」と見なされた子どもたちがその後も同様に「似ている」と見なされるのかどうかについては検討されていなかった。そこで、本研究では、保育者の見方から子どもの類似度を探り、クラスごとに年間を通じた類似度には変化があるのかどうか検討する。

II. 方法

1. 調査対象

M幼稚園の年少から年長の各2クラス、計6クラスである。筆者は、この園に週1回程度伺い参与観察を行っており、子どもの様子のある程度把握している。各クラスの人数は、1学期の時点で、年少H組14名(男児7名・女児7名)、年少B組12名(男児5名・女児7名)、年中Y組20名(男児13名・女児7名)、年中S組19名(男児11名・女児8名)、年長F組16名(男児7名・女児9名)、年長C組16名(男児6名・女児10名)である。年中クラスは、年少から年中に進級する際、クラス替えがあった。よって、年少・年中クラスともに、2004年度4月から形成された。年長クラスは、年中より同じクラス構成である。なお、クラスによっては、1年の間に数名の転入・転出があった。そのため、転入児・転出児は、存在しない学期では欠損値扱いとした。

2. 調査方法

各クラスの担任6名に面接を行った。全て女性である。面接時期は、2004年7月・12月、2005年2月である。クラスの人数が多い場合には、面接に時間がかかるため、面接を2回もしくは3回に分けて行った。年長C組については、諸事情により2学期・3学期のみの調査となった。

各クラスの担任に、面接時の学期の時点でのクラス園児について一対比較をしてもらい、各組の園児がどのくらい似ているかを1:「非常に似ている」から7:「非常に違う」の7件法にて回答を求めた。何を基準として判断するかは保育者に任せた。評定の後1組ずつ、どうしてそのように思ったかについて、理由を自由に述べてもらった。クラスごとに、 nC_2 (n はクラスの人数)の評定数が得られることになる。

3. 分析方法

学期間で評定の差があるかどうか検討するために、クラスごとに各学期をペアとして、対応のあるt検定を行った。

次に、ペアとした子どもの評定の値を用い、クラス別学期別にクラスター分析を行い、いくつかのグループに分類した。クラスター化の方法はWard法、測定方法は平方ユークリッド距離

を用いた。さらに、各学期で構成されたクラスターを用い、クラスごとにクラスター分析を行った。クラスターの解釈は本研究において重視しなかったが、類似度を尋ねたときに各クラス担任保育者が述べた理由を一部用いた。

さらに、学期間で、「似ている」「違う」の評価に変化があるかどうかを検討するために、一対比較の結果をリカテゴリーし、1から3を「似ている」、5から7を「違う」とした。4は、そのまま「どちらとも言えない」とした。その値から、全学期で「似ている」、2つの学期で「似ている」、全学期で「違う」、2つの学期で「違う」、それ以外のペアという、5つに分類した。この分析では、欠損値のある場合、即ち、転入児・転出児が含まれるペアは分析から除いた。年長C組については、2・3学期のデータを用いて検討した。

なお、分析には、SPSS 13.0J for Windowsを用いた。

III. 結果

1. クラスごとの学期による評定の変化

本研究においては、クラス担任の保育者にクラスの子どもの類似度を尋ねたわけであるが、クラス全体を見たときに学期による評定のずれがあるかどうか検討する必要があると思われた。どのクラス・学期の平均値も3から5の間であった。このことから、どのクラス・どの学期においても評定に著しい偏りはないと思われた。そこで、各学期をペアとした対応のあるt検定を行った。その結果をTable 1に示した。5%水準で有意であったのは、年少B組の2-3学期、年中Y組の1-2、1-3学期、年中S組の2-3、1-3学期、年長F組の1-2、1-3学期、年長C組の2-3学期であった。H組ではどの学期の組み合わせにおいても有意差は見られなかった。これらのことから、クラス全体の評定は年間を通じて一定ではなく、学期によって変化すると思われた。この傾向は、特に年少クラスよりも年中・年長クラスで見られた。「似ている」「違う」のどちらに変化していくのかはクラスによって様々であった。

Table 1 クラス別学期別の対応のあるt検定の結果

		t 値	自由度	有意確率 (両側)
年少H組	1学期-2学期	0.00	77	1.00
	2学期-3学期	-0.61	55	0.54
	1学期-3学期	0.07	55	0.94
年少B組	1学期-2学期	-1.44	54	0.16
	2学期-3学期	2.42	77	0.02
	1学期-3学期	0.53	54	0.60
年中Y組	1学期-2学期	-3.51	189	0.00
	2学期-3学期	0.75	173	0.45
	1学期-3学期	-2.54	173	0.01
年中S組	1学期-2学期	0.37	152	0.71
	2学期-3学期	2.71	153	0.01
	1学期-3学期	2.82	136	0.01
年長F組	1学期-2学期	2.32	90	0.02
	2学期-3学期	-0.62	87	0.54
	1学期-3学期	2.18	87	0.03
年長C組	2学期-3学期	-2.43	119	0.02

2. クラス集団の中でのグループの分類

2名の子どもをペアとした評定から、クラスの子どもをいくつかのグループに分類するためにクラスター分析を用いた。クラスターの分類には、結合段階の5前後を基準とした。年少H組では、どの学期でも3つのクラスターに分かれ、各クラスターの構成メンバーはほぼ似通っていた（Figure 1～3）。学期ごとに構成されたクラスターの結果を用いて、さらにクラスター分析を行った結果を示したのがFigure 4である。これを見ると、3ないし4のクラスターに分割できると思われた。b 1・b 2・b 7のクラスター、b 6・g 14のクラスターは、3学期を通じて全て同じクラスターに属していた。特に、b 1・b 2・b 7のクラスターは男児のみで構成されており、担任保育者にとって「ちょっと気になる子ども」（刑部、1998）であることが窺えた。

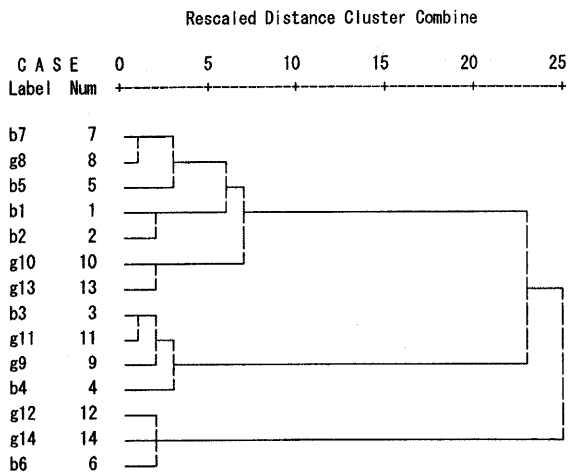


Figure 1 年少H組1学期のデンドログラム
* b は男児, g は女子を示す。以下同様である。

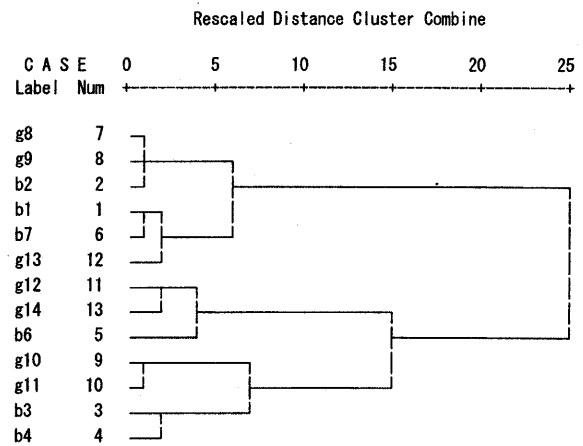


Figure 2 年少H組2学期のデンドログラム

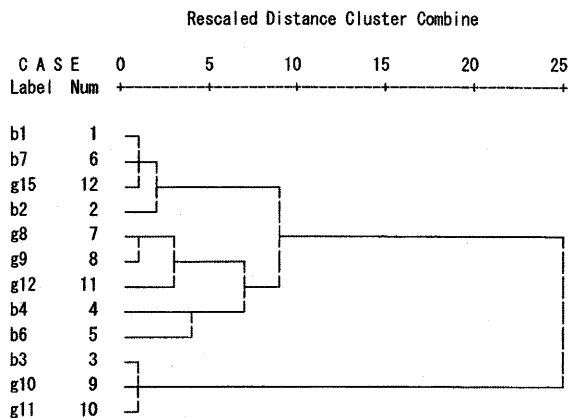


Figure 3 年少H組3学期のデンドログラム

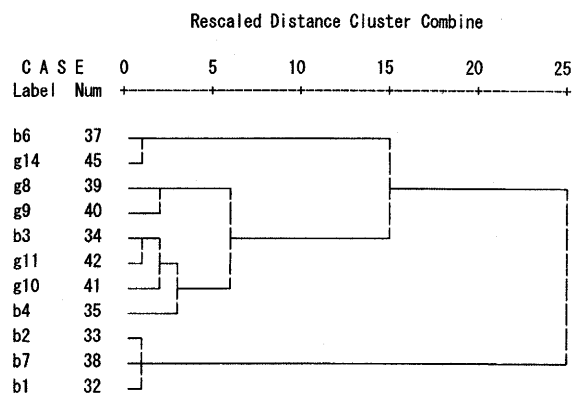


Figure 4 年少H組のデンドログラム (年間)

年少B組では、1学期は5つのクラスター、2・3学期はそれぞれ3つのクラスターに分けることができると思われた。Figure 5から7を比較すると、1学期から2学期にかけてクラスターの構成過程が単純になる傾向が見られた。1～3学期のクラスターを用いて、さらにクラスター分析を行った結果をFigure 8に示した。早い段階でクラスターとして構成されているb1・b2・b3・g9のグループは、このクラスの担任保育者にとって、「気になる」存在であると思われた。

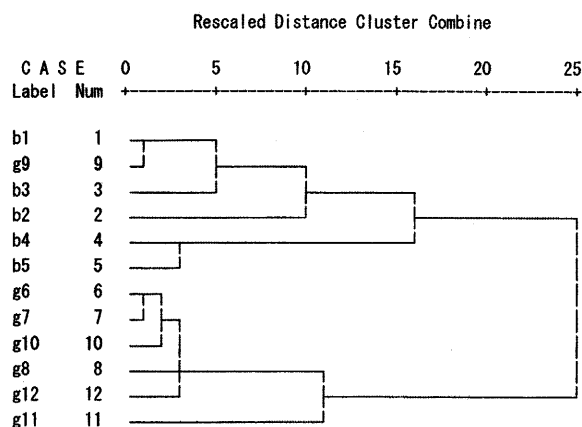


Figure 5 年少B組1学期のデンドログラム

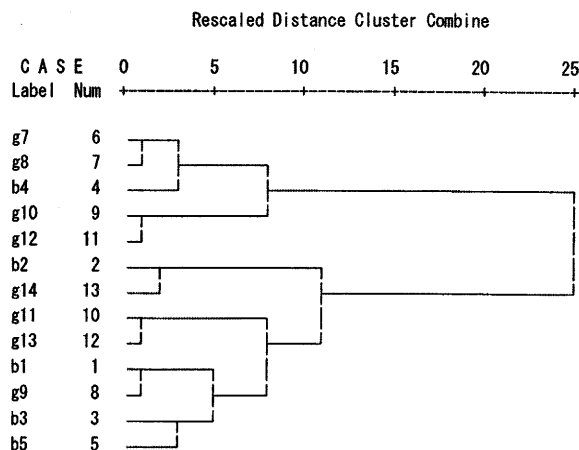


Figure 6 年少B組2学期のデンドログラム

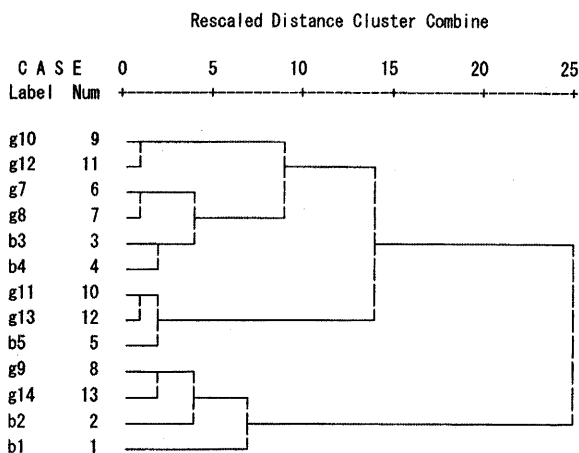


Figure 7 年少B組3学期のデンドログラム

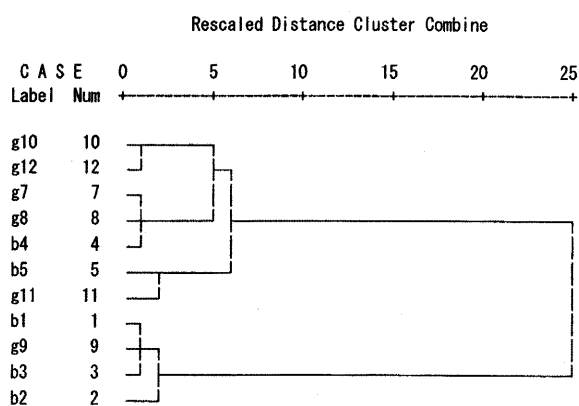


Figure 8 年少B組のデンドログラム (年間)

年中Y組では、1学期が5、2学期が4、3学期が3と、徐々にクラスターの数が増減する、即ち、クラスター構成過程が単純化する傾向が見られた (Figure 9～11)。つまり、これは、学期を経るごとに、クラス園児がいくつかのまとまりを持ってみられるようになっていくことを示していると思われる。3学期を変数としてクラスター分析を行った結果がFigure 12である。これを見ると、3つのクラスターに分けることが可能であろう。

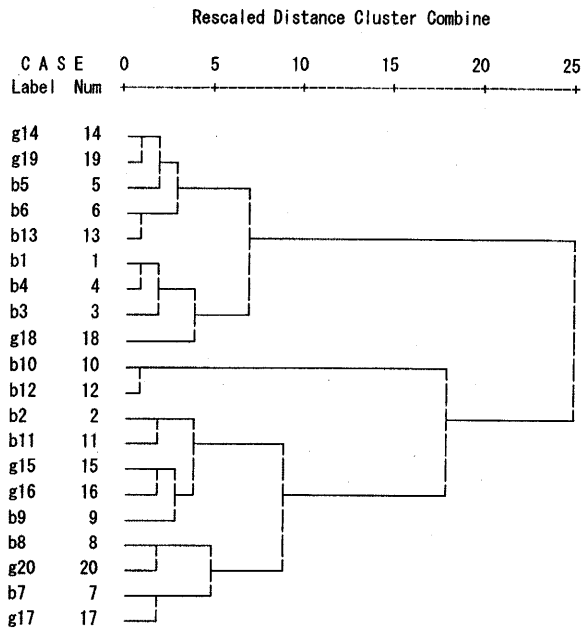


Figure 9 年中Y組1学期のデンドログラム

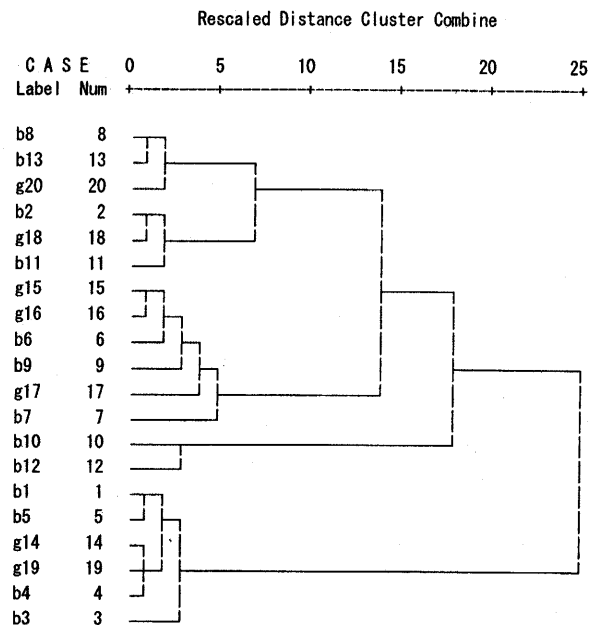


Figure 10 年中Y組2学期のデンドログラム

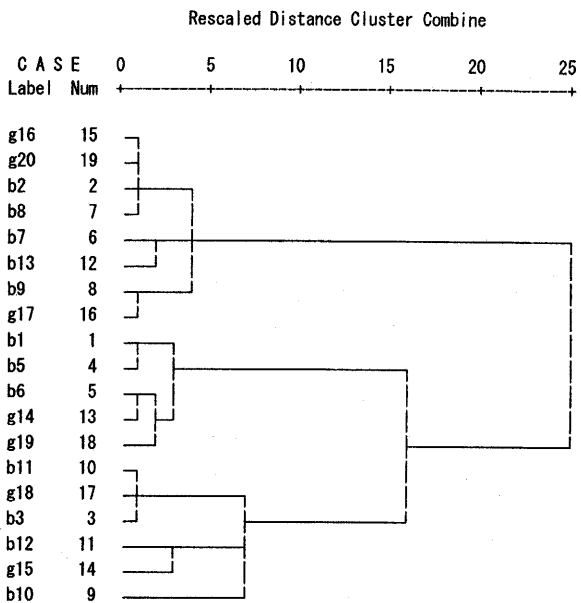


Figure 11 年中Y組3学期のデンドログラム

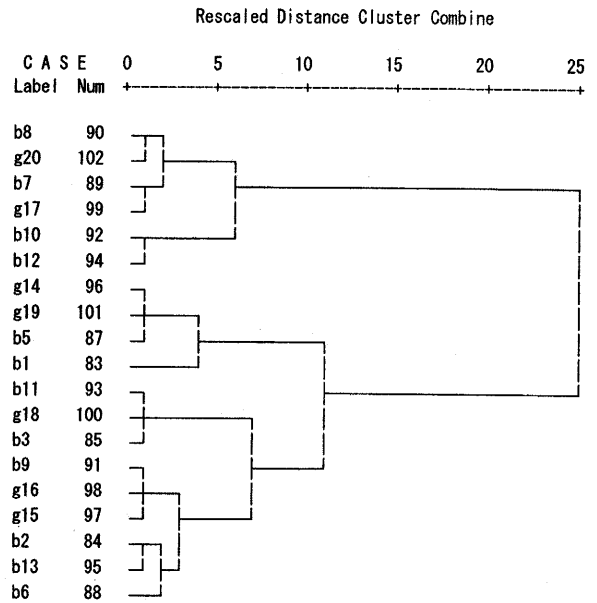


Figure 12 年中Y組のデンドログラム (年間)

年中S組では、1学期が3、2学期が6、3学期が4のクラスターに分割可能であると思われた (Figure 13~15)。3つの学期のデンドログラムを比較すると、学期を経るごとにクラスター凝集過程が複雑になる傾向が見られた。全学期のクラスターを用いた分析では、4つのクラスターに分けることが可能であると思われた (Figure 16)。

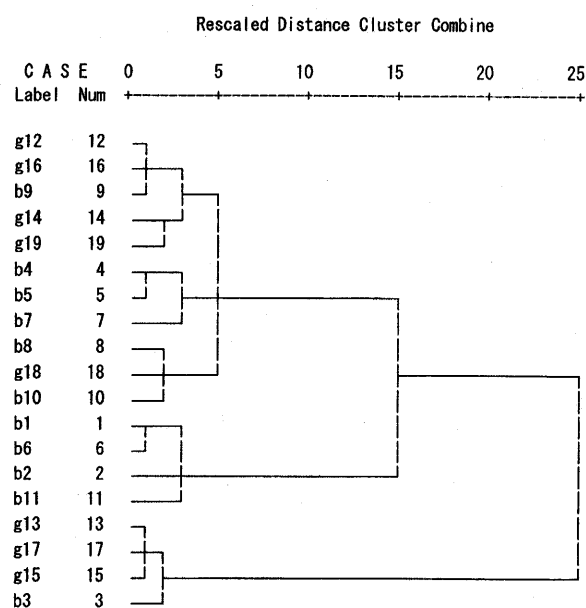


Figure 13 年中S組1学期のデンドログラム

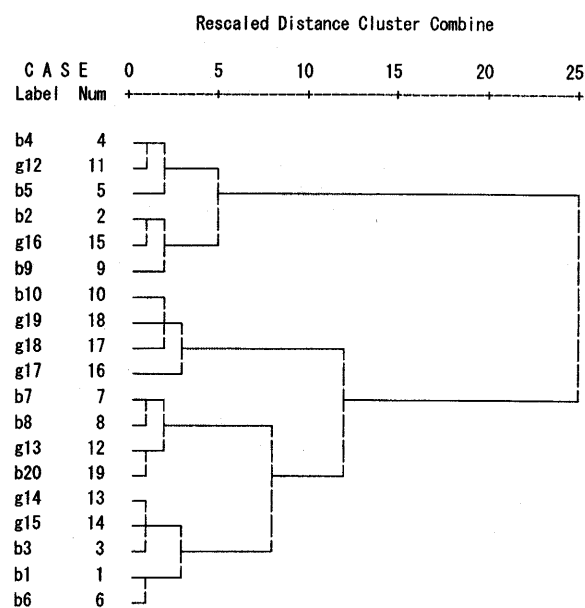


Figure 14 年中S組2学期のデンドログラム

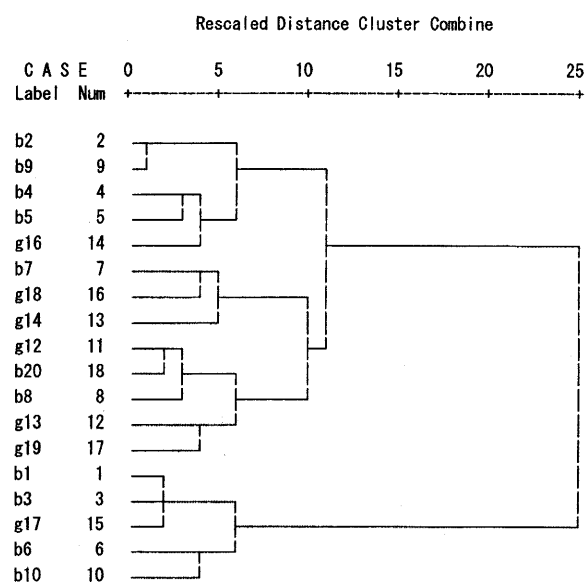


Figure 15 年中S組3学期のデンドログラム

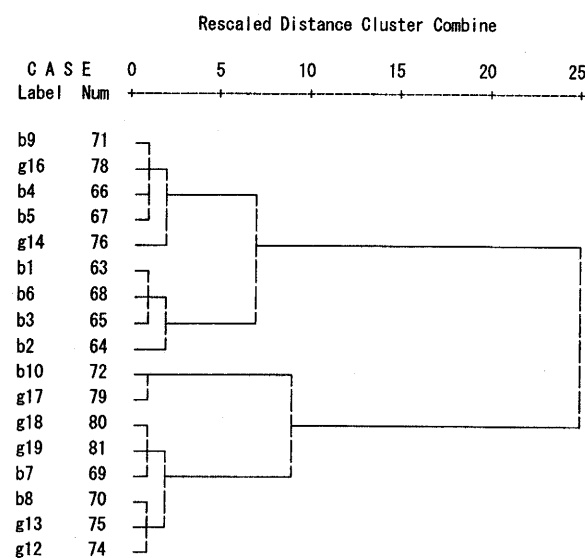


Figure 16 年中S組のデンドログラム（年間）

年長F組では、1学期が4、2・3学期が3のクラスターに分割可能である（Figure 17～18）。学期ごとの各クラスターの構成メンバーを見ると、年間を通じてクラスターは安定している傾向があった。3つの学期のクラスターの結果を用いてさらにクラスター分析を行った結果がFigure 20である。これを見ると、3つのクラスターに分けることが可能であろう。

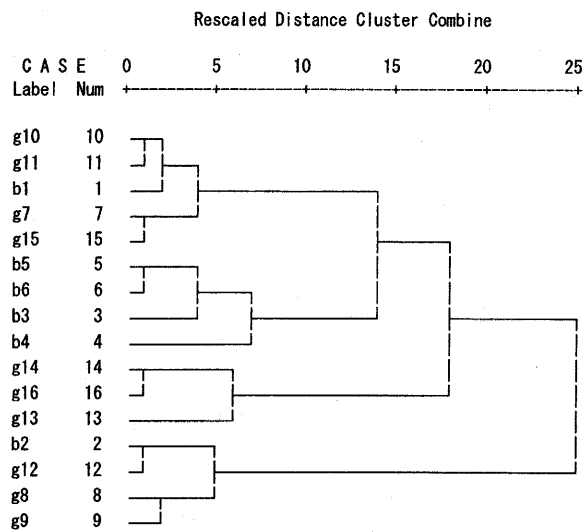


Figure 17 年長F組1学期のデンドログラム

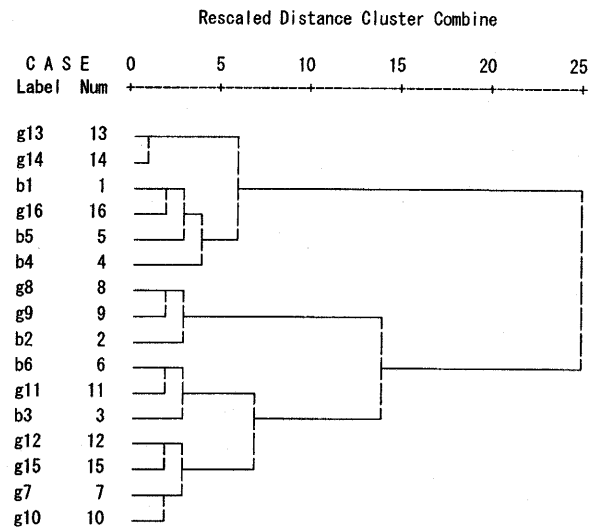


Figure 18 年長F組2学期のデンドログラム

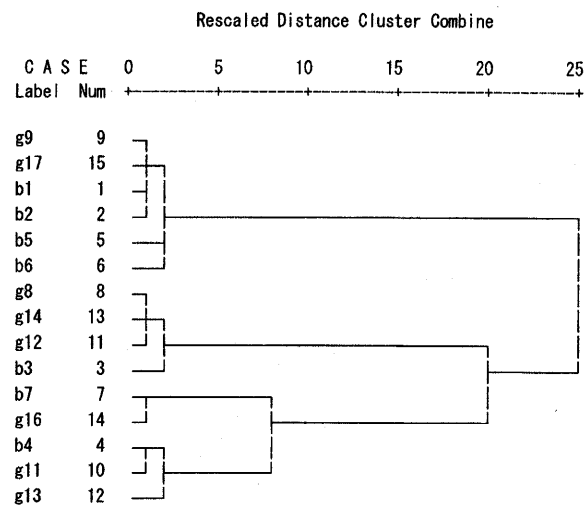


Figure 19 年長F組3学期のデンドログラム

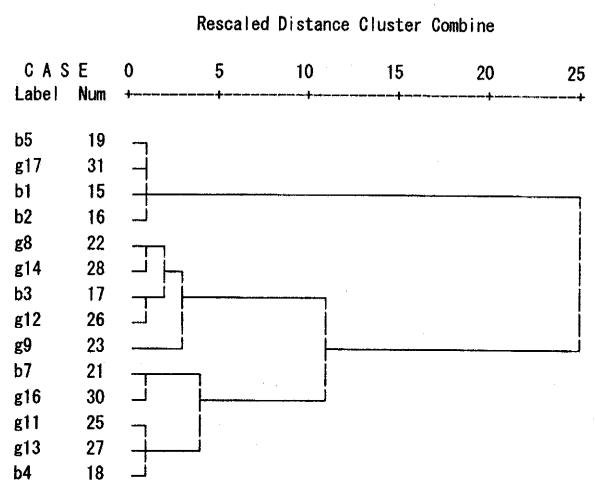


Figure 20 年長F組のデンドログラム (年間)

年長C組では、2学期が4、3学期が3のクラスターに分けることが可能であろう (Figure 21・22)。クラスターの構成メンバーを比較すると、2・3学期間でかなり変動が見られた。2・3学期のクラスターを用いてさらにクラスター分析を行った結果がFigure 23である。2つの学期のデータしか用いていないので、クラスターは他のクラスに比べて単純に凝集されている。このデンドログラムから、2つのクラスターと見るか4つのクラスターと見るか判断が難しいが、2・3学期のデンドログラムと比較すると2つのクラスターと見ることができるだろう。

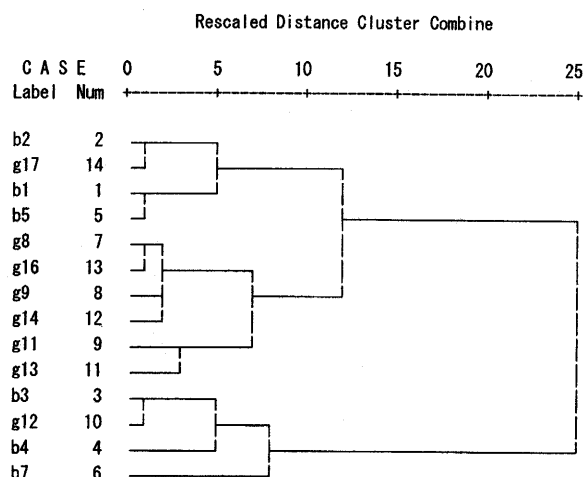


Figure 21 年長C組2学期のデンドログラム

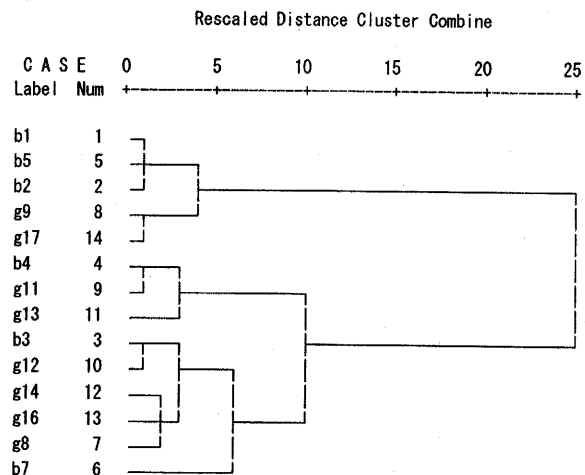


Figure 22 年長C組3学期のデンドログラム

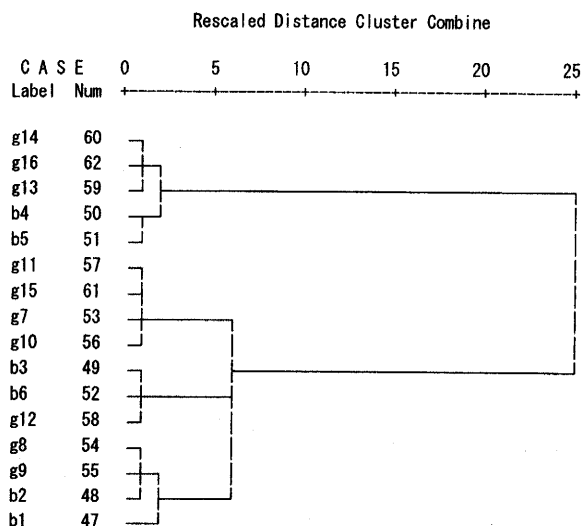
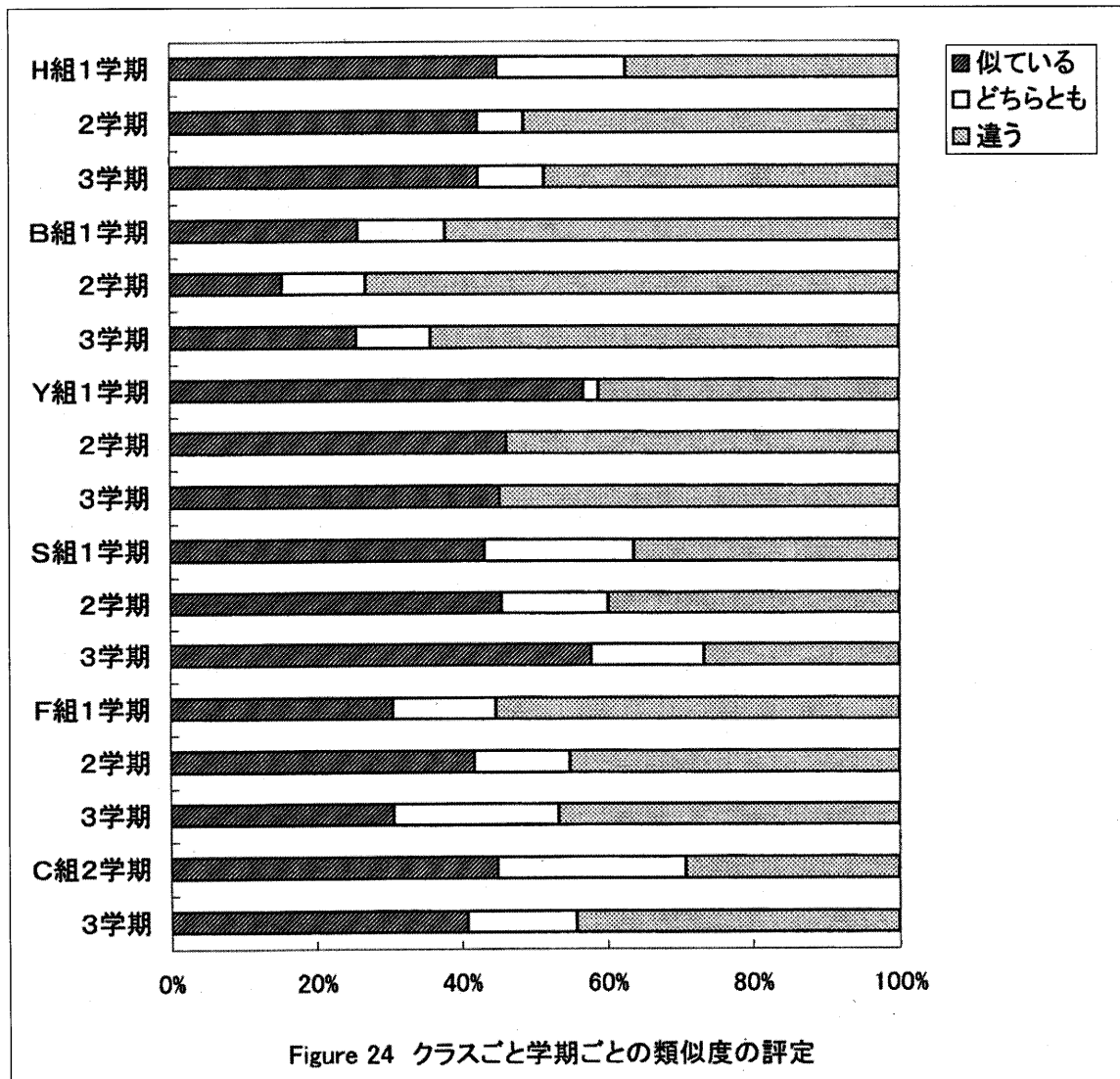


Figure 23 年長C組のデンドログラム (年間)

3. 子どものペアごとの評価の一貫性

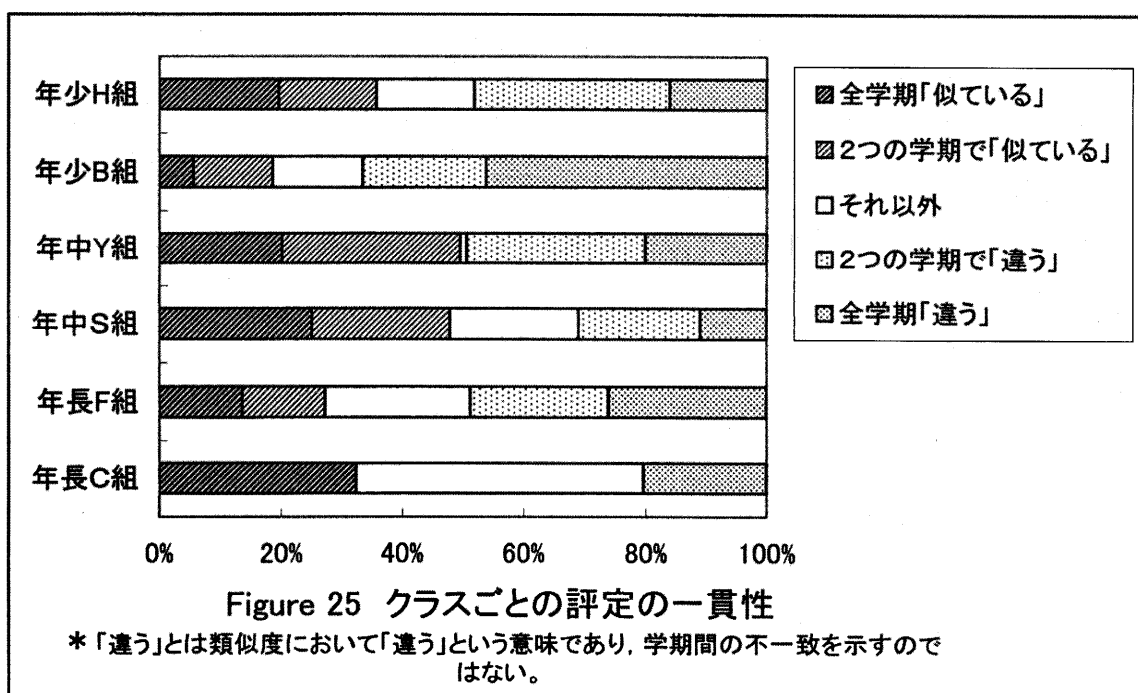
学期ごとに「似ている」「違う」と評価された子どものペアがそれぞれどのくらいの割合で存在するのか検討したところ (Figure 24), 年少H組では「似ている」「違う」割合とも40%前後と高く, 1学期のみで「似ている」割合が「違う」割合より高く, 2・3学期では逆であった。年少B組では, 学期によって増減はあるものの, 「違う」ペアの割合が多くを占めた。年中クラスにおいて見ると, Y組では, 学期を経るに従って, 徐々にではあるが「似ている」ペアの割合が減少し, 「違う」のペアの割合が増加する傾向があった。それに対して, S組ではY組と逆の傾向があり, 「違う」ペアの割合が減少し, 「似ている」ペアの割合が増加する傾向があった。年長クラスについて, F組ではどの学期においても「違う」と評価された割合が「似ている」ペアの割合より高かった。C組では, 「違う」ペアの割合が2学期より3学期で増加した。



では、子どものペアは、学期を経るに従ってどのように評価されているのであろうか。1学期に「似ている」と評価されたペアは、それ以後も「似ている」と評価されているのであろうか。1学期に「違う」と評価されたペアはそれ以後もずっと「違う」と評価されるのだろうか。それとも、「似ている」「違う」の評価は、学期によって変化があるのだろうか。これらのことを検討するために、各々の子どものペアが学期ごとにどのような評価をされているのかを算出した。それを示したのがFigure 25である。

まず年少クラスについて見てみよう。H組では全学期で「似ている」ペアの割合が19.6%，2つの学期で「似ている」のが16.1%であるのに対して、「違う」ペアは全学期が16.1%，2つの学期で「違う」が32.1%であった。年少B組では、全学期・2つの学期で「似ている」ペアがそれぞれ5.6%・13.0%，全学期・2つの学期で「違う」ペアがそれぞれ46.3%・20.4%であった。2クラスで値の大きさには差があるものの、どちらのクラスにおいても、子どものペアが3つの学期で全く異なる評価をされることは少なく、「違う」という評価で一貫しているペアの割合が高いといえる。

年中クラスについて、Y組では、全学期・2つの学期で「似ている」と評価された割合がそ



れぞれ20.1%・29.3%，全学期・2つの学期で「違う」と評価された割合が20.1%・29.3%であり，全く同じであった。S組では，全学期・2つの学期で「似ている」と評価された割合は25.0%・22.8%，「違う」と評価された割合はそれぞれ11.0%・21.3%であった。どちらのクラスも「似ている」「違う」どちらかで評価が一貫している割合は高く，S組では「似ている」ことで一貫している割合が高かった。

年長クラスについては，F組において，全学期・2つの学期で「似ている」と評価された割合はどちらも13.6%であった。「違う」と評価された割合は26.1%・22.7%であり，「違う」ということで一貫している割合の方が高かった。C組では，2・3学期のデータのみの分析において，「似ている」割合が32.5%，「違う」割合が20.0%であり，2つの年長クラスを簡単には比較できないものの，異なる傾向が見られた。

これらのことから，学期ごとの評価は，3つの学期のうち2つの学期で一貫している場合まで含めれば，「似ている」「違う」のどちらかで一貫している場合がほとんどであるということが言える。つまり，1度「似ている」と評価された場合，その傾向がそれ以後も持続することが多いと思われた。

IV. 考察

本研究は，クラス集団内の子どもの類似度から，クラス全体の評価の変化，クラス内のグループ化，そして年間を通じての一貫性があるのかどうかについて検討した。クラス全体の評価の変化については，年少H組を除いて，平均値に変化が見られた。この傾向は，年少クラスよりも年中・年長クラスで顕著であった。ただ，「似ている」「違う」のどちらの方向へ移行する傾向があるのかはクラスによって様々であった。

クラス集団内の子どもを類似度からいくつかのグループに分類することを試みると，どのクラスにおいても3前後に分けることができた。しかし，そのまとまりの傾向は，クラスによっ

て違いが見られた。例えば、年中のY組・S組のクラスター分析の結果を比較すると、逆の変化をしていることがわかる。即ち、Y組では学期を経るごとにいくつかのまとまりを持ってみられるようになっていくことを示し、S組では逆の傾向が見られた。年長クラスにおいても、2クラス間で違う傾向が見られた。

子どものペアの評定の一貫性を検討すると、2つ以上の学期で評定が一致している場合がどのクラスにおいても大多数を占めた。つまり、年間を通じて、「似ている」子どもはずっと似てっていると評定され、「違う」子どもはずっと違うと評定された。このことから、担任保育者にとっては、年間を通じて、子どもの類似度は安定的に捉えられていると言うことができる。

これらのことから、学年による傾向というのは特に存在しなかった。これは、子どもの年齢がたとえ同じであっても、クラスによって様子が異なることを意味している。その要因として、子どもと担任保育者の2つが考えられる。子どもには個人差が存在する。個人差を持った子どもによってクラス集団が形成されるわけであるから、クラスごとの傾向に違いがあっても当然なのかもしれない。また、クラスの中で「ちょっと気になる子ども」（刑部，1998）が存在することによってクラスの他の子どもの見え方に影響することもあるだろう。「ちょっと気になる子ども」は、どうしても保育者の注目を受けがちであるし、かかわる時間も多くなると思われる。そのことによって、クラス集団の他の子どもを見る視点も影響を受ける可能性がある。クラスター分析では、そのような子どもは早く独自のクラスターを形成する傾向が見られた。年少の2クラス、年長F組ではこのようなことが窺えた。

クラス集団は、子どもだけで構成されているのではない。保育者もクラス集団の一員であることはいうまでもない。そして、保育者にも個人差が存在する。特に、本研究では、子どもの情報を担任保育者から得る方法をとっているため、その影響が強いかもしれない。しかし、現実場面においても担任保育者のクラス集団において果たす役割は大きい。子どもが園でのスキルを身に付けていくには、そのクラスの保育者の影響があるはずであるし、保育者の視点、関わりによって、園での子どもの様子が変わることは起こりうることである。子どもの様子が変われば視点も変わるかもしれない。逆に、視点が変わらなければ、子どもは変わらないのかもしれない。担任保育者の視点が学期によって異なることはあり得ることである。

しかし、本研究で検討した「似ている」「違う」という側面は学期によって変化することは少なかった。おそらく、「似ている」「違う」という点だけではわからないことがそこに存在すると思われる。つまり、今回の分析においては、個々の子どもがなぜ「似ている」のか、「違う」のか全く明らかにされていない。保育者は、その「似ている」「違う」という評定を何にもとづいて行っているのだろうか。即ち、常に同じ視点、もしくは1つの視点から類似度を判断していることになれば、3学期を通じて同じ傾向が見られるだろうし、様々な視点、つまりその学期において担任が重要だと思う視点に違いがあれば、その時点での「似ている」子どもは異なることになるだろう。これらのことを明らかにするためには、類似度を判断するときに担任保育者が述べた理由の分析が必要である。無藤（1992）が言うように、保育には、保育を支える親や保育者の信念が重要である。子ども中心の保育ということが「保育所保育指針」や「幼稚園教育要領」で唱われているが、保育者あつての園である。保育者が子どもを支え、クラス集団を形成していくことによって、個々の子どもの発達とともに、集団としてのクラスも発達していくと思われる。

謝 辞

毎回時間のかかる調査にご協力いただいたM幼稚園の先生方には、厚く御礼申し上げます。

文 献

- 安藤明人 1984 自由遊び場面における幼児の相互作用の分析 日本心理学会第48回大会発表論文集, 568.
- 安藤明人 1985 自由遊び場面における幼児の相互作用の分析(2) 日本心理学会第48回大会発表論文集, 667.
- Ellis, S., Rogoff, B., & Cromer, C.C. 1981 Age segregation in children's social interactions. *Developmental Psychology*, 17, 399-407.
- Howes, C. 1988 Same- and cross-sex friends: Implications for interaction and social skills. *Early Childhood Research Quarterly*, 3, 21-37.
- 謝文慧 1999 新入幼稚園児の友だち関係の形成 発達心理学研究, 10, 199-208.
- 飯島婦佐子 1991 3年保育児と2年保育児の対人行動 日本発達心理学会第2回大会発表論文集, 158.
- 石村貞夫 1998 SPSSによる多変量データ解析の手順 第2版 東京図書.
- 刑部育子 1998 「ちょっと気になる子ども」の集団への参加過程に関する関係論的分析 発達心理学研究, 9, 1-11.
- 鯨岡峻 2001 人とかかわりの育ちを見る視点 森上史朗・吉村真理子・後藤節美(編) 保育内容「人間関係」 ミネルヴァ書房.
- 前原寛 1997 保育における集団の形成について 保育の実践と研究, 2, 11-19.
- 文部科学省教育課程課・幼児教育課(編) 2000 幼稚園教育年鑑 平成12年度版, 初等教育資料2000年12月臨時増刊, 77-91.
- 森山史朗 1992 われわれの実践と実践研究の立場 森上史朗・今井和子(編著) 集団って何だろう：人とかかわりを育む保育実践 ミネルヴァ書房.
- 無藤隆 1992 子どもの生活における発達と学習 ミネルヴァ書房.
- 永田陽子 1992 保育者の役割とは 森上史朗・今井和子(編著) 集団って何だろう：人とかかわりを育む保育実践 ミネルヴァ書房.
- 岡野雅子 1984 幼児期の相互交渉の形成について：保育園3歳児4歳児の場合 日本家政学会誌, 35, 261-269.
- 岡野雅子 1996 仲間関係の発達 佐藤眞子(編) 乳幼児期の人間関係 培風館.
- 岡本依子・菅野幸恵・塚田一城みちる 2004 エピソードで学ぶ乳幼児の発達心理学：関係のなかでそだつ子どもたち 新曜社.
- 佐伯胖 1997 保育研究の在り方：小川の再批判にこたえる 保育の実践と研究, 2, 47-60.